

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: CBGB in New York)

《若きギタリスト》

ニューヨークのレストランでウェイトرをしていた頃の仲間は、みな個性的な人たちがばかりだった。その中でも忘れることのできない仲間のひとり、ミュージシャンの男のことを書いておきたい。

彼は当時自分より年が3つくらい下、21歳前後だった。一緒に働いた期間は半年から1年未満ほどだったが、音楽をやっていた者同士ということで、店が暇な時などはよく一緒に音楽の話などいろいろと話をしたものだ。彼は日本人の両親の間に生まれたが、幼い頃からアメリカで育ったため英語はペラペラのネイティブで、英語がペロペロだった自分は彼によく助けてもらった。

彼は日本人の良さも持っていたが、現地の学校で学び友人もアメリカ人が多かったため、気質はどちらかというアメリカ人的だったと思う。バンドマンらしく自慢の長髪をなびかせ、決して背

は高くなかったが、いかにも運動神経が良さそうで、どちらかという軟派な感じではなく男気を感じさせる硬派な男だった。ある日、右か左か忘れたが、彼が目じりの上にピアスを付けて来た日があった。「まだ痛むんですよ…」といいながらも我慢して働いている姿が印象的だったが、ニューヨークに移り住んでまだ1年ちょっとの自分からすると頼もしい弟のような存在でもあった。

彼はよく仕事の後に地元の仲間たちとアイスホッケーをしていたこともあって、アイスホッケーのスティックを持って店を出入りすることも多かったが、そんな彼は地元NYを中心に“FINAL WARNING”というHard Punk/Hard Metal/Thrash Metal系の過激なバンドでリード・ギタリストとしても活動していた。一度だけNYの名門ライブハウス「CBGB」で行われた彼のバンドのライブを見に行ったことがあったが、自分がやっていたJazzとは全く異なるジャンルの音楽ながら、ツアーにも出る機会も多だけあってバンドも様になっていて、彼のギター腕前もなかなかでかなり堂に入ってカッコ良かった。

また、当時ちょうど3曲入りのミニ・アルバムを出した時期でもあり「マサさん、聴いてください！」と嬉しそうにCDを手渡してくれたことがあった。それが『EYES OF A CHILD』(頁右下参照)というCDだ。彼も作曲りに参加していて、ジャケットのデザインは確か彼自身のアイデアだったと思う。記念にサインをしてもらい、そのCDは今でも大切にしている。

そんな彼がある日突然レストランを去ることになったのは、とある日のディナーの時間帯だった。些細なことだったと思うが、店のオーナーであるおやじさんに注意をされ、納得がいかなかったのが突然「マサさん、俺辞めます！」と一言伝えると更衣室に姿を消した。店内には客も入っていたので、その場を離れることが出来なかったが、それまでも度々おやじさんに態度面などで注意されることもあり、彼自身も何か不満があったのかもしれない。暫くするとアイスホッケーのスティックを抱えて私服に着替えた彼が姿を見せると、おやじさんに一言「Fuck You Man!」と言いつち、足早に店を出て行ってしまった。ほんの10分ほどの出来事だったが、彼が店に戻る、または戻れる可能性はないことは明白だった。寂しさもあったが、正直いかにも彼らしいような…ある種の微笑ましさも感じた瞬間だったが、後日その日の稼ぎ(=チップ)を受け取ることなく去って行った彼を尋ねて、2001年に崩壊したツインタワーに程近い場所にあった彼の両親が切り盛りしていたお弁当屋さんに顔を出した。ちょうど彼も店を手伝っていたため、彼に直接チップを手渡し、少し立ち話をした。変わらず元氣そうだった姿を見て安心したものの、その日が彼の元氣な姿を見る最後の日となった…。

彼の両親からレストランの仲間に連絡があったのは、最後に会ったあの日から半年ほど経った頃だったのだろうか。その知らせは衝撃的なものだった。バンドのツアー中に訪れていたノース・フィラデルフィアの教会で銃によって自ら命を絶ったというのだ。全く信じられなかったが、その後レストランの仲間と共にフェリーとタクシーを乗り継いで彼の両親が住んでいたスタッテン・アイランドの自宅を訪れた。勿論、葬儀などは既に行われた後で両親と彼の思い出をするのが精一杯だったが、彼がこの世に存在しないことは事実のようだった。英語で書かれた遺書が残されていて、それを両親に見せてもらったのかどうか今では記憶が曖昧だが、彼にしか知りえない悩みや葛藤があったのだろう。英語で長々と書きなぐったような一枚の紙を見せてもらった記憶がある。

気の毒な両親の姿に胸が痛んだが、それにしても若過ぎた。当時まだ22~23歳くらいだったが、「将来はギタリストとしてビッグになりたい！」と夢を語っていた彼の姿からすると自ら命を絶たという事実が全く信じられなかった。いいギタリストだったのに…。

それから更に半年くらい経った後、仕事帰りに自分が住んでいたアッパー・ウエスト72丁目にある地下鉄の駅舎近くの通りを歩いていると、ギター・ケースを背負ってこちらに向かって走って来る長髪の若い男とすれ違い、一瞬立ち止まった。その顔立ち、髪型、背格好が亡くなった彼にそっくりだった…。思わず声をかけようかと思ったが、一瞬の出来事でもあり「彼はもうこの世に存在しないはずだ」という思いが瞬時に浮かんで振り返らずにその場を去った。今でも時々彼がアメリカのどこかのライブハウスでギターをかき鳴らしているのではないかと思う時がある…。



EYES OF A CHILD
FINAL WARNING

Tribal War Records

(EP)1994

1. Faith
2. Rise
3. Eyes of a Child